大工道具の産地をたずねて

森下一期

子どもに道具を，ということで道具について研究することも会の課題の一つになっていますが，かねてから道具の産地として知られる三条市をたずねたいと思っていました。幸い新潟県で開かれた研究会に参加する機会を得ましたので，その帰り，8月21日，須藤さんとともに半日を費して見学してきました。

長岡市で宿をとり朝8時頃三条市に向いましたが，その頃から日ざしは非常に強く，また暑い日となりそうでした。三条市に入る頃から機械や鉄鋼の中小の工場が数多く見られ市全体が機械，工具，道具の生産とかかわりがあるという印象を与えます。市街地は，道も細くゴミゴミした感じで，工場というより，普通の家ぐらいの間口の鉄工所があちこちにあります。

私たちは「高儀」という問屋さんを訪ね話をうかがってから案内をしてもらいました。代表取締役の高橋一夫さんが三条市の既要を説明して下さいました。かっては大工道具が主であったのが，プライヤ，ペンチなどの工具類の生産が多くなっていること。最近大工道具が出るようになったのは，中学の技術科関係と日曜大工による所が大きいこと。本来大工道具は建築関係で生かされるが，建築様式の変化，電動工具の出現が大工さんを変化させ，道具の良し悪しがわからなくなっている。兵庫の三木と生産をわけあっており，100％近いものも多くある。そのように集中するのは，労賃の問題，関連企業が全部集まっているからなど，種々な背景についての一応の理解を得ることができました。これ等のことについては，あらためて詳しく知りたいな，という感想ももちました。

しかし，何と言っても驚ろいたのは，大工道具の生産を行なっているのは，工場というしろものではなく，カジヤだと言われたことです。2～3人でやっている所が非常に多く，全体で5～600軒と聞いても，まだ，イメージがわかない程でした。

見学した所は，7ケ所ほどですが，多くは，普通の町並から路地に入り込んだ所の住いの一角が作業場になっています。そこで，おやじさんとおくさん，おやじさんと息子さんが汗をタラタラ流しながらやっているのです。確かに簡単な機械は入っています。足下で操作できるハンマー，ノコギリの打ち抜き機械グラインダー，目立て機械，木工機械と。しかし，自動化とはほど遠く，わずか一つ，ノコギリの面を研磨する機械を見ただけです。ちょうど，この8月に「国際金属加工機械展」を見たばかりですので，その前近代的な姿によけい驚ろかされました。高橋さんが説明してくれた，「機械化しても，それだけの需要が見込まれないし，このように小規模にやっているので，石油危機等の不況にも，それほど大きな影響もうけずに，肩をよせ合って何とかやっていけるのです。」という言葉に復雑な気持となりました。

大工道具として代表的な，ノコギリ，カンナ，ノミの製造を見ることができましたので，それぞれの工程をおってみたいと思います。

ノコギリ

材質についてはこちらにも知識がなく，時間も少なかったために聞くことができませんでしたが，鉄工所から求めた鋼板を形に合わせて裁断するところからはじまります。それを行う所には種々な型が用意されています。ざっと見た所でも4～50枚もありました。

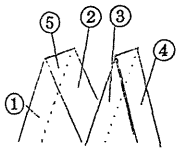
型に切り抜いたものを一定の厚みにするた

めにグラインダーをかけます。一台は機械が入っていましたが，思った程うまくいかないとの話です。他方では，大きなグラインダーの前に座り込んで，手で押し込んでいます。

これをやっているのは，問屋さんの付属の工場で，焼入れ等もやるので，１０人程が働く工場となっています。ここでつくられたものがノコギリの刃を打ち抜ぬくところにまわされます。普通の規格のものは台にセットすれば，一つづつ順々に打ち抜いていきます。規格からはずれるものは手で操作しなければなりません。

これを行なっているのは１坪半ほどの土間で，おやじさんとおくさんの二人です。扇風機をかけながら朝から晩まで座り込んで100枚に満たない数しかできないとのことです。

打ち抜きの終ったものが，目立てにまわされます。最初は機械でヤスリをかけますが，仕上げは手でやります。目立ての機械といっても，一ぺんに削れるわけではありません。



図のように，４つの部分をそれぞれ削る必要があります。ヤスリの角度が固定されるため，４台で一セットになっています。一枚のノコギリを目立てするのに，４回機械にセットしなければならないわけです。更に⑤の面は手でやらなければならず，仕上げもやるのですから仲々大変なことです。

この目立てをやっている所も，１坪半から２坪ぐらいの狭い所です。入口からのぞいて見るのがせいぜいでした。しかし，このような所でも，私達をじゃまにすることなく，非常に親切に説明をしてくれました。まさに職人とでも言うのでしょうか。私たちは時間の関係で急いでもいたのですが，〝もうすぐできるから〟と一通り目立てをやって見せてくれたものです。

目たてが終ると，あさりをつけます。あさりとは，木を切り込んでいったとき，切り口の巾がノコギリ身の厚さと同じですと，木にはさまれて動かなくなってしまうため，刃を外側に出して，切り込みの巾を広くすることです。これは，目立てをするところで，機械でやってしまいます。

これだけの工程は考えて見ればわかるのですが，もう一つ重要な工程がありました。そこでノコギリの良し悪し，直段の高低が違ってくるのだそうです。ノコギリ身の凹凸を調べ，修正する工程です。考えてみれば，確かに必要なことですが，驚ろいたのは，それを金床とハンマーで，目で見ながらやることです。表紙の写真がそれをやっているところです。問屋に付属の工場でやっていましたが，大きく開いた窓の方にむかって三人の職人が座り込んで，一枚一枚を光にすかして，凹凸を調べ，ハンマーでたたくのです。まさに熟練を要する仕事です。良いノコギリをつくるには打抜き，目立てなど加工が終るたびにやる必要があるのだそうです。普通のものは，一回やるかやらないかだというのですから，良いものが高価になるのもうなずけます。

カンナ

他の道具もそうですが，昔は問屋で扱ったのは，刃の部分だけで，柄をつけたり，台をつけるのは，大工さんが自分でやっていたのだそうです。それが最近は，柄もつけ，台もつけなければならなくなっているというのですが，カンナの製造も，刃をつくる所，研ぎ屋，木工所を通してできあがります。

私たちが見たかじやさんは，刃付けまでやっていましたが，普通は刃の形をした鉄片をつくるだけです。

カンナとかノミの刃は，地金というやわらかい鉄に，鋼鉄をはりあわせてつくります。かじやさんの仕事は，それをやって，形を整え，焼き入れをすることです。ですから当然火を使います。この真夏の最中も，扇風機をまわす程度ですから，本当に汗をタラタラ流しながらの作業です。地鉄を真赤に焼き，接

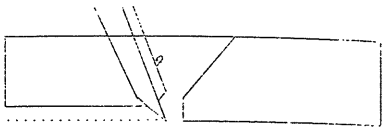
合剤の砂のようなものをまいて，鋼をのせ，ハンマーでたたきます。このハンマーは足で操作できるような機械が入っていますが，使いやすいように，土間に穴を掘って自分がその中に入って仕事をしていました。

刃物の良し悪しは，鋼の種類と，焼き入れにあるとのことですが，この短時間の見学では，そこまで理解することはできませんでした。問屋さんでいただいた「岩崎航介遺稿集・刃物の見方」を読んだところ，良い刃物をつくるために，驚ろく程の努力がはらわれていることを知ることができましたが，今回は，もっぱら，つくり方の見学に終っています。

焼き入れを見ることはできませんでしたが刃をつけるのも，仲々大変です。おやじさんがつくったものを，息子さんがグラインダをかけて，刃付けをしていましたが，片面を斜めに削るだけではありません。反対側を凹状に削ることも，半径が背丈ほどもあるグラインダをつかって削ります。これは，真平では，刃裏を研ぐのが大変だからです。凹状にしたあと，刃先の裏出しをします。

ここでつくるカンナの刃は，台をつけて市販すると，7～8千円とのことですが，一日に，わずか，17～8枚しかできないということです。ここでも，買う身になってみると大工道具は高いという気持がありますが，これだけ手間をかけていることを考えると，むしろ安すぎるのかな，と思わざるを得ません。

カンナでは，刃だけではなく，台も大切な役割をはたします。普通に使用するには，むしろ，台の調整で切れるかどうかきまるとのことです。私たちの見た木工所は他からみて，比較的大きな工場でした。十数名の人が働いており，一応流れ作業的に行なわれています。刃をおさめる穴をあける所などは機械が使われていますが，仕上げはやはりつきのみで削っています。私たちがそこで注意されたのは，台の刃より先の部分が低くなっていなければならないことです。それをやることによって切れ方が非常に違うことを実際にやって見せていただきました。



ノミ

ノミの製造は，カンナとそれ程違いません。形を整える所が違う程度です。私たちが見た所は，10名程が働いているちょっとした工場です。ここでも，流れ作業的にやっているのでかなりの数を生産しているようでした。もっとも，工場といっても，足の踏み場もないような狭い所で，かじやさんに毛が生えたようなものともいえます。

研ぎ屋さんは，アパートの奥の一角が作業場になっていて，回転する砥石でやっています。水を使いますから壁に砥石の粉が層をなしてかたまってついていたのが印象的です。おやじさん1人でやっているようでしたが，日に400本ぐらいのノミを研ぐとのことです。最近，学校などから刃のこぼれたカンナの研ぎが数多くきて大変だ，と話していました。

以上かけ足で多くの所を見学してきましたが，大工道具の製造の主体はまだ手工業的なもので，一つ一つ手間をかけてつくられていることを知ることができました。いわゆる名人芸と違うのでしょうか，職人かたぎがまだ強く残っています。確かにチャチな道具も出まわっていますが，私達，使う者が道具の製造に理解を持ち，良い道具にはどれだけの手間がかかるかを知るならば，安いということだけを目やすにすることもなくなると思います。

また機会をあらためて，道具の産地をたずねたり，道具の素晴らしさを学ぶ場を設けたいと思っています。その時には会員のみなさんにも呼びかけていきますので，御期待下さい。